

# 「新たな教職員の学び」の実現に向けた探究型研修の開発

企画研究部	部長	今野 勝明
	主任研究主事兼指導主事	松尾 博史
	主任研究主事兼指導主事	神脇 順子
	研究主事兼指導主事	鬼頭 宏和
	研究主事兼指導主事	大崎 康央
	研究員	松岡 利晃
	研究員	中嶋 昭夫
研修・支援部	研究員	瀬尾 恵
	研究主事兼指導主事	岩崎 佳子
	研究主事兼指導主事	植田 博樹
	研究主事兼指導主事	岡村 佳之
	研究主事兼指導主事	渡邊 岳
地域教育支援部	研究主事兼指導主事	渡辺 佳代子
	研究主事兼指導主事	塩見 文浩
	研究主事兼指導主事	片山 直樹

## 1 要約

今年度、京都府総合教育センター（以下、センター）では、令和4年12月の中央教育審議会答申にある「新たな教師の学び」の実現に向けて「探究的な学び講座シリーズ（全3回）」を実施した。この研修を「探究型研修」とし、教職員自らが探究する（探究的に学ぶ）ことを通して、児童生徒の探究的な学びをデザイン、マネジメントする力の向上を図ることを目指した。受講者が対話やリフレクションを重視した研修を通して、何を学んだのか、どのように学んだのか、受講者の探究観に揺さぶりはあったのか等、ファシリテーターによる見取り、受講報告、リフレクションシートを通して分析する。

また、センターが探究型研修を開発するにあたり、関係したセンター所員自らが様々な葛藤や試行錯誤の中で取り組み、探究することを経験したことも踏まえ、今後の方向性について考察し、次年度以降の研究・開発につなげる。

キーワード：探究・探究的な学び、探究観、リフレクション、対話、教職員の学び

## 2 研究目的

変化の激しいこれからの時代を生きる子どもたちには、自ら問いを立て、課題を探究し、他者と協働しながら人生を切り拓いていく力が求められる。教師にはこのような子どもの力を引き出せるよう、子どもを主語とした探究的な学びを展開することが求められることから、本研究で探究活動に焦点を当てた探究型研修を実施し、教職員自身が探究を体験しながら、それぞれの学びを深化させ、「探究す

るとはどのようなことか」を整理し、自らの「探究する力」や「子どもたちの探究的な学びをデザインし、マネジメントする力」の向上を図ることを目的とする。

また、探究型研修の開発に当たり、研修担当者と受講者の学びの相似形も意識しつつ、センターも本研修を探究的に構築していくこととした。その中で得られた知見は、新たな教職員の学びの姿の実現に向けた取組へと繋げることをとする。

### 3 研究方法

#### (1) 研修担当者の探究

「探究的な学び講座シリーズ」では、3～4名の受講者グループに対して、センター所員がファシリテーターとして対話に参加する。本研修におけるファシリテーターには重要な役割があるが、センター所員のほとんどが未経験であった。ファシリテーターを担うのは、本研究のためにセンター内で組織した探究ワーキンググループのメンバーであり、研修前には共通認識をもつ場、研修後にはファシリテーターとしての気づきを共有する場を設定した。また、他県の研修や学校を視察する機会を設けたこともあり、この研究がセンター所員にとっての探究となった。

令和4年答申において、「教師の学びの姿も、子供たちの学びの相似形であるといえる。」「教師自らが問いを立て実践を積み重ね、振り返り、次につなげていく探究的な学びを、研修実施者及び教師自らがデザインしていくことが必要になる。」とあることから、本研究では、研修担当者と教職員の学びの姿も相似形だと捉えながら、進めることとした。

#### (2) 令和6年度「探究的な学び講座シリーズ」

##### ア 研修目的（ねらい）

受講者自身が探究的な学びを経験することを通して、「探究する力」「探究的な学びをデザインし、マネジメントする力」の向上を図る。

##### イ 研修概要

受講者は事前資料を作成し、それを基に行う対話から、これまでの実践や経験を振り返る。また、振り返りを通して、自身の課題（実践）について、問いを設定し、計画を立て、実践し、再び振り返るといった探究サイクルを意識した活動をインターバル期間を有効に活用し、体験する。そこでシリーズⅡ・Ⅲでは、インターバル期間における実践を振り返り、対話を通して自他の価値観に触れながら、新しい価値を見いだしたり、変容を意識したりすることで、研修の最後には新たな実践や問いに向かう展望をもつことを目指した。

6月) シリーズⅠ *事前課題 (必須)	10月) シリーズⅡ *事前課題 (任意)	1月) シリーズⅢ *事前課題 (任意)
対話Ⅰ (自己紹介/あなたの考える探究) 提起・提案からの学び・対話Ⅱ 事例からの学び・対話Ⅲ 情報提供 リフレクション・対話Ⅳ (本日の学び)	対話Ⅴ (4ヵ月の実践を通じた気づき)	対話Ⅵ (実践交流) 対話Ⅶ (7ヵ月の実践を通じた気づきから、現在考える『探究とは』) 資料からの学び・対話Ⅷ 対話Ⅸ (今後の展望) 情報提供・リフレクション クロージング

(表1) 令和6年度「探究的な学び講座シリーズ」研修概要

ウ 受講者の構成

小学校：教諭（8名）

中学校：管理職（1名）、教諭（17名）、講師（1名） 計 27名

エ 受講者の姿

(ア) シリーズⅠ（令和6年6月17日（月）実施）※集合研修（10:30～17:00）

シリーズⅠでは①自己紹介②自身のこれまでの経験の中で取り組んだ「探究」について③本研修（全3回）を通して自身が探究したい「課題（テーマ）」及びその背景をA4用紙1枚以内でまとめることを受講者への事前課題とした。受講者が探究したい課題は（表2）のとおりであった。

分類	人数
授業づくり（教科）	15
授業づくり（総合的な学習）	1
探究	4
学力	1
組織づくり	2
認知・非認知能力	3
その他（自己テーマ）	1
計	27

（表2）受講者の探究課題

長時間の対話に初めは戸惑う受講者もいたが、シリーズⅠの受講報告では、これまでの研修では得られなかった成果があったという記載も見ることができた。

(イ) シリーズⅡ（令和6年10月18日（金）実施）※オンライン研修（15:30～17:00）

シリーズⅡでは、「実践を通じた気付きの共有」をテーマに対話を実施した。4ヵ月の実践で自身のテーマの実践発表にならないように「共に探究する仲間同士の作戦会議」であることを受講者に伝えた。受講報告からは、実践の途中での経過や悩み、気付き等について対話を通して共有することで取組を見直しつつ、前向きな気持ちをもつことができた姿が見られた。

(ウ) シリーズⅢ（令和7年1月20日（月）実施）※オンライン研修（13:30～17:00）

シリーズⅢでは、「7ヵ月の実践を通じた気付きから考える、現在の探究とは」をテーマに対話し探究観を整理した。そして、資料に「探究モードへの挑戦」の一部抜粋を用いて受講者の探究観を改めて揺さぶりながら、研修のクロージングを目指した。しかし、用いた資料が想像以上のインパクトをもっていたことから、受講者にとって揺さぶりとはならず、ある種の回答になってしまっていたように感じる部分もあった。

また、終了時には受講者に「リフレクションシート」の記入を依頼した。このリフレクションシートは、受講者の研修全体を通したリフレクションを促す目的と、受講者がこの研修をどのように感じたのかを分析し、次年度構想に役立てる目的を持つ。以下の（表3）はその質問項目及び回答結果の一部である。

質問項目	とてもそう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	まったくそう思わない
①「探究」とはどのようなものか、研修受講前と比べて御自身の考えに変化があったと思いますか。	20	5	0	0
②本研修は、これまでのセンター研修との違いがあったと感じましたか。※自由記述あり	21	3	1	0
③本研修は、あなたにとって有意義であったと思いますか。※自由記述あり	20	4	1	0
④本研修を通して、御自身の「探究する力」の向上を図ることができましたか。	12	11	2	0

⑤本研修を通して、御自身の「児童生徒の探究的な学びをデザインする力、マネジメントする力」の向上を図ることができましたか。	1 1	1 1	3	0
--	-----	-----	---	---

質問項目②に関する自由記述

<p><b>【とてもそう思う】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・答えが無い、ということを感じた研修でありました。仲間と対話をして答えを考えていく。共に答えを導いていくような研修でした。</li> <li>・終始モヤモヤしたが、自分の考えを伝え、他の先生の考えを聞き対話をする中で、自分の考えの輪郭が見えかかったから。</li> <li>・これまでのセンター研修では、講義を聞くことが多く、受け身的な内容が多かったように思います。本研修では、委ねられた部分が大きく、また話す、聞く、考える等に多くの時間が確保されており、自分ごとにして主体的に参加できました。実践、報告、振り返り、学び合い、また実践というサイクルも学びに繋がりやすかった。</li> </ul> <p><b>【どちらかといえばそう思わない】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・正確には「どちらとも言えない」と感じています。センター研修では「根本理念」から実際の手法、実践紹介、自分たちで行うワークなどをいつも経験いただいております。ただ 本講座は私自身の力量の無さにより、つかみどころがない研修だと感じていました。</li> </ul>
---

質問項目③に関する自由記述

<p><b>【とてもそう思う】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・答えがあるというより、それを探そうとすることそのものの価値を考えるようになったから</li> <li>・なかなか、この研修のために時間をかけて考えをまとめるということができず、もったいなかったと思っています。しかし、「探究する力」を子どもたちに育てることは、やっぱり大切なことだと、再認識することができました。教職員の「探究する力」と「生徒の探究する力を育てる教育活動を構想、展開する力」を育てる作戦を立てたいと思います。</li> <li>・探究と一言に言っても奥が深いこと、答えのない時代を生きていく子どもたちとどのように考えていくのか、自分自身の探究活動を通して、子どもたちの身になって考えることができた。(中略) 子どもたちの探究だけでなく、教師の探究もあわせて行っていく必要があると思うので、どのように来年度に生かしていくか私自身探究していこうと思う。</li> </ul> <p><b>【どちらかと言えばそう思わない】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「明確な答え」を求めていたのではありませんが、やはりモヤモヤしていることに変わりはありません。そのモヤモヤが探究的な学びにつながる、とおっしゃるのかと思いますが、もしもその返答であるならばそれもモヤモヤします。</li> </ul>
--

(表3) リフレクションシートの回答 (一部抜粋)

①の結果から、研修を通して受講者が「探究」とはどのようなものか知識や概念理解の深まりがあったと考えられる。また、②③の結果からも、受講者は本研修を通して自ら探究することで探究観の再構築や探究の意味や意義を深めていったと考える。しかし④⑤の結果から、受講者自身が「実践に生かす力」の向上を感じにくかったことが推測される。その要因には探究的な学びが試行錯誤を伴う活動であることや、明確な「〇〇ができる」といったものを教示しないということが関係しているのではないかと推察する。

また、本研修においては、自らの学びや思考プロセスについて記録し、振り返ることで変化・変容に気付くことが重要である。しかし、今年度は「記録する」活動が十分に行われなかったため、受講者自身が探究的な学びを実感できなかった可能性がある。そもそも本研修の学びはすぐに実践に役立つような内容は少ないかもしれない。また、シリーズ毎の学びが繋がりをもち、受講者の変化・変容に気付きを与えるような場面が少なかったかもしれない。そこで、次年度は「記録」をより丁寧にしたいと考える。

#### 4 他県センター等視察

探究的な学び講座シリーズでは所員がファシリテーターとして参加する点、「新たな教職員の学びの姿」の実現を目指す点で、これまでのセンター研修とは異なる視点を要する研修であった。そのため、先進的な取組を実施している自治体との情報交換や学校での取組を通して、研修の充実を図った。次の（表4）は今年度実施した視察の一覧である。

視察場所	視察目的
高知県教育センター（5月）	ファシリテーターとしての作法・心構え
福井ラウンドテーブル（7月）	対話実践
独立行政法人教職員支援機構（8月）	N I T Sによるコア研修の改善・変化
長崎県教育センター（9月）	省察を重視した研修（ファシリテーターなし）
長野県総合教育センター（9月）	クロスエイジセッション・教職員の学び
長崎県教育センター（11月）	省察を重視した研修（ファシリテーターあり）
佐世保市教育センター（11月）	A L A C Tモデルによる研修設計
広島叡智学園（12月）	学びの変革・探究的な学びによる学習者の姿
福井ラウンドテーブル（2月）	対話実践

（表4）令和6年度 他県センター等視察先・視察目的一覧

#### 5 課題と展望

##### (1) 課題

探究的な学び講座シリーズを通じた受講報告や対話での受講者の発言から、児童生徒が探究的に学ぶことの重要性は認識されつつあり、また学校現場ではその実現に向けて試行錯誤されている様子が見て取れた。本研修において、「児童生徒の探究及び探究的な学びの本質について」教職員自身が対話を主とした探究的な学びを経験し、これまでの探究観を整理したり捉え直したりすることに、研修としての価値があるとしている。受講報告やリフレクションシート、対話の中での発言からも、受講者にその価値を共有することは一定達成できたと感じる。しかし、受講者自身の発言に、「探究すればするほど、孤独感・孤立感を感じてしまう。」というものがあつた。これは、探究のもつ性質によるものかもしれないが、学校全体で探究に取り組もうという機運が高まっていない、または取組に対する機運は高まっているものの、探究に対する考えが個々の教職員で揃わなかったりすることもその要因と考えられる。

1万を超える京都府の教職員のうち、この研修を受講するのは最大で40名程度である。府内への波及を考えたとき、センターが本研修を継続し、京都府の特徴的な研修の一つとして文化にするだけでなく、受講者が受講後にも探究できる環境をハード面とソフト面の両面から支援していくための次の一手が必要と考える。

##### (2) 展望

###### ア 探究型研修の今後

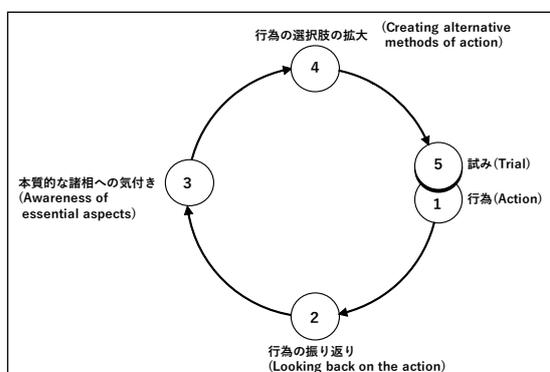
令和6年度に実施した研修での成果と課題を踏まえて、令和7年度は以下の2種の探究型研修を実施することとした。

###### (ア) 令和7年度「探究的な学び講座シリーズ～教職員の探究～」

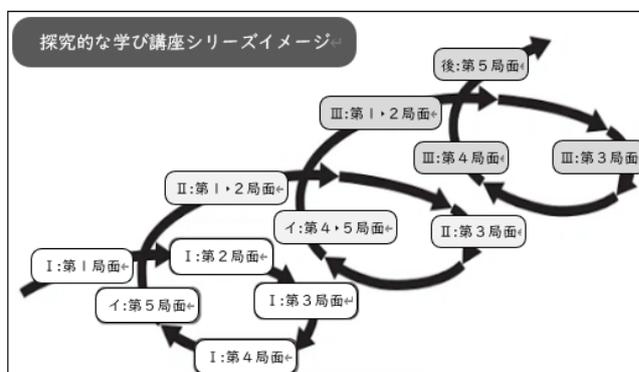
学習指導要領にある「探究における生徒の学習の姿」をベースにA L A C Tモデル（図1）

を活用したセンター独自の探究サイクル（図2）を実践する。

探究的な学び講座シリーズでは、受講者のリフレクションが学びの深化に非常に大きな意味合いをもっている。しかしながら、令和6年度では「記録する」活動が不十分であったため、リフレクションの質の高まりを感じる事ができなかった。そこで、令和7年度はリフレクションで得た気づきや学びを文字として記録に残す活動を重視する。ALACTモデルを立体的に捉えているセンター独自の探究サイクルにおいて、第5局面から次の第1局面へと移る際に、前回の第1局面とは異なる段階（階層）にいることを気付く仕掛けとして、受講者の記録が有効であると考えている（立体感を出す仕掛けが受講者自身の学びの記録である）。これは、インターバル期間に受講者に日々実践を記録させ、反省を促すのではなく、リフレクションを通して「経験」から学んでもらうことに他ならない。しかし、令和6年度の研修場面では、記録したことよりも記憶していることが重要視されている様子も見られた。記憶と記録を二項対立的に捉えるのではなく、記録していることの重要性が受講者に伝わるように講座を構想することで受講者が自身の成長や達成感、効力感を研修中にも感じられるようにしたい。



(図1) ALACTモデル  
 第1局面 行為  
 第2局面 行為の振り返り  
 第3局面 本質的な諸相への気づき  
 第4局面 行為の選択肢の拡大  
 第5局面 試行



(図2) センター独自の探究サイクル  
 I : シリーズ I  
 II : シリーズ II  
 III : シリーズ III  
 イ : インターバル期間

シリーズIでは、受講者はそれぞれの「探究観」を持ち寄り、対話を通してこれまでの実践や経験を振り返る。またシリーズ全体を通して、対話や資料から得られた気づきを丁寧に記録し、実践の中で変容していく自身の様子を可視化する。可視化することでの気づきを基に再構築した「探究観」から子どもたちの探究的な学びのデザインやマネジメントについて今後の展望をもつ。(表5)

6月) シリーズI *事前課題 (必須)	10月) シリーズII *事前課題 (任意)	1月) シリーズIII *事前課題 (任意)
対話I (自己紹介/現在の探究観) 資料の読み込みI・対話II 資料の読み込みII・対話III 情報提供I リフレクション・記録	対話IV (実践を通じた本質への挑戦) 記録	実践交流 対話V (実践から捉える現在の探究観) 情報提供II リフレクション・記録 クロージング

(表5) 令和7年度「探究的な学び講座シリーズ」研修概要

(イ) 令和7年度「授業に生かす探究講座Ⅰ～リフレクション編～」 「授業に生かす探究講座Ⅱ～資料活用編～」

シリーズとして実施する「探究的な学び講座シリーズ」は、前年度の反省や年度毎の受講者の様子を見取ることを通し、新たな教職員の学びの姿の実現を目指した京都府の探究型研修の核となる研修として、改善しながらの継続した実施を目指す。一方で、この研修はファシリテーターが必須の研修となっていることから、受講者数を拡大しての実施が難しい。そこで令和7年度は、「探究的な学び講座シリーズ」のワーク（リフレクションと資料活用）について受講者が体験を通して、その目的、効果、方法を学び、授業に生かすための一助となるような講座を実施する。

Ⅰ ～リフレクション編～（5月、11月実施）	Ⅱ ～資料活用編～（6月、11月実施）
趣旨説明・対話の作法 対話Ⅰ（これまでの探究実践の成果と課題） 対話Ⅱ（それぞれの探究活動の共通点と相違点） 情報提供（リフレクションの効果と活動の意味） リフレクション	趣旨説明・対話の作法 資料の読み込み・対話Ⅰ 情報提供Ⅰ（資料の読み方と活動の意味） リフレクションⅠ 情報提供Ⅱ（探究の定義・目的・条件） リフレクションⅡ

（表6）令和7年度新設「授業に生かす探究講座Ⅰ・Ⅱ」研修概要

#### イ センター組織における持続可能性

本研究では、センター内に探究ワーキンググループを設置した。年に10回以上の会議を実施し、ワーキングメンバー自身が探究することで、今でも「探究とは何か」を模索しており、メンバーの探究観はもちろん、ワーキングとしての探究観の変容を実感している。このワーキンググループでの探究こそが、本研修を継続していくための必要不可欠な要素でもあり感じており、次年度以降も引き続きチームとして活動していくことが肝要である。まずは今年度の課題について検討しつつ、その改善策や方向性は次年度の探究ワーキンググループに引き継ぐことでセンターとしての探究が止まらないようにしたい。

#### <引用及び参考文献>

- ・白井俊（2022）『探究モードへの挑戦 第5章OECDにおける「探究」の考え方』人言洞
- ・フレット・コルトハーヘン（2010）『教師教育学：理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ』学文社
- ・文部科学省（2019）（『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説総合的な探究の時間編』学校図書株式会社